

漂客物語

全

860  
38





Y6038

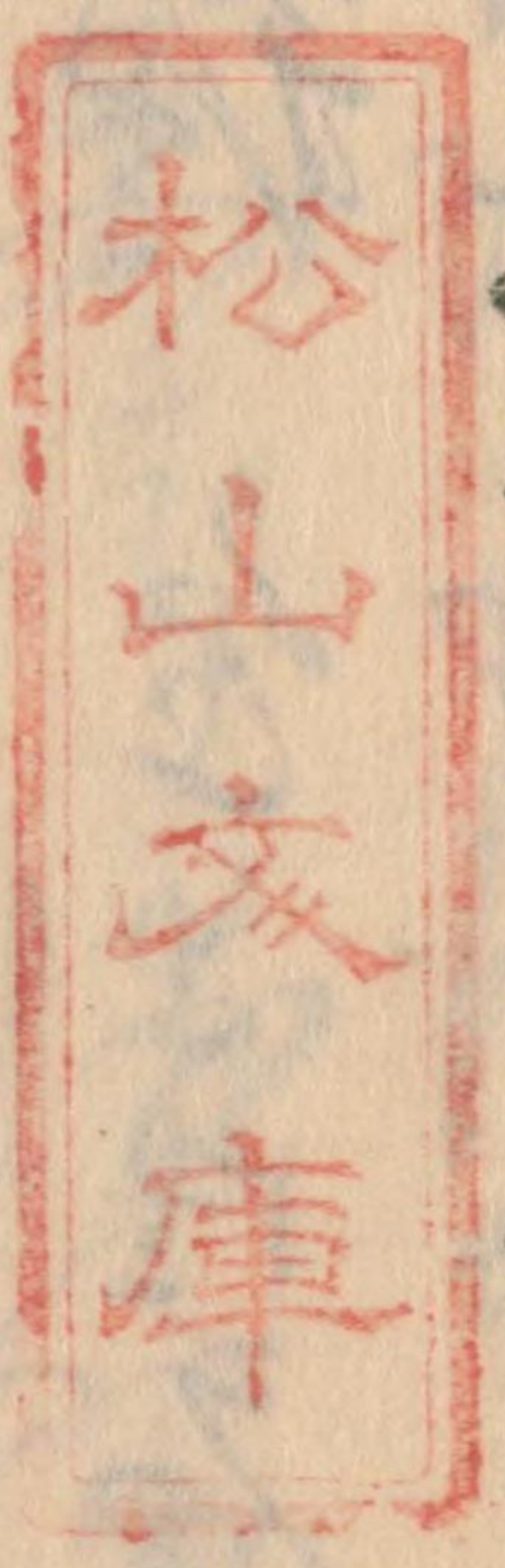
倉編序文在所當志淺上郡

勇崎和人は南時

序南下新可出職人片至松尾常牙

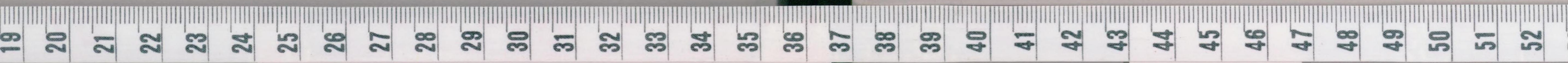
漂流人

徳三橋中口



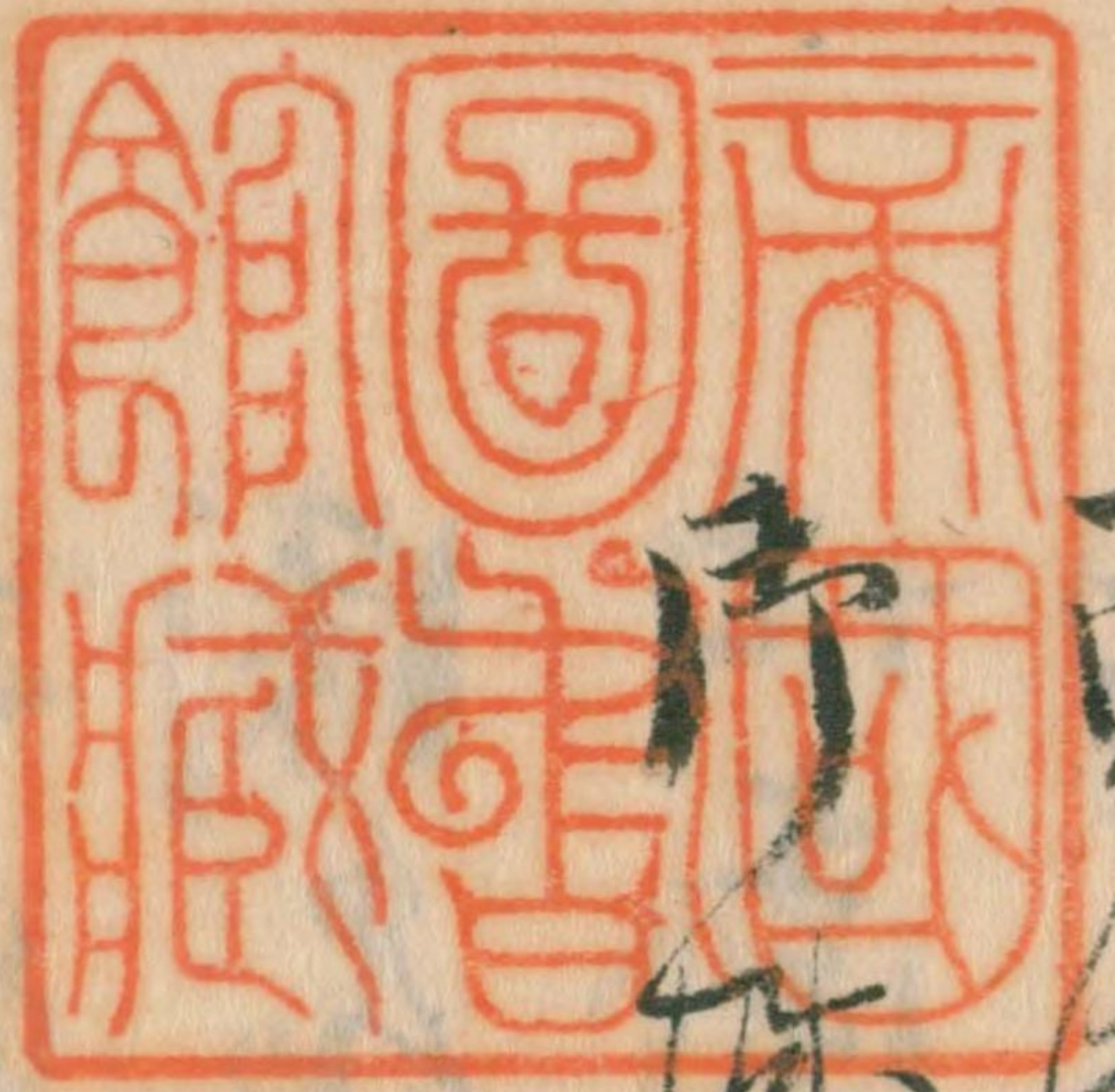
此の九ノ一

一 去ル古加永三戌年九月十日 堪所  
素出帆紙の無跡 堀三越り同所





Y6038



倉編序安在所當志淺上郡

勇時和人はあつ

序下新可出職人片至松山



漂流人

徳三橋中口

一 去儿古加永三戊年九月十日 堪所  
素出帆銀の無跡 捕り切り同所





出帆より大坂路丸龜浦に  
又出帆北志の安梨の津田前  
亦出帆して博賀の津田前  
法所解るは改を請江之表の津  
北南新地同局中を新官  
積物比水極所種色は  
北早運江之表出帆博賀

高所より法改を請を博賀  
少之積物比水極所種色は  
出帆相模灘を系出遠江  
灘を系出北志の津田前  
熊野沖に揚るは十月廿九日  
取しより北志の風を急るは  
本船を沖に揚るは十月廿九日



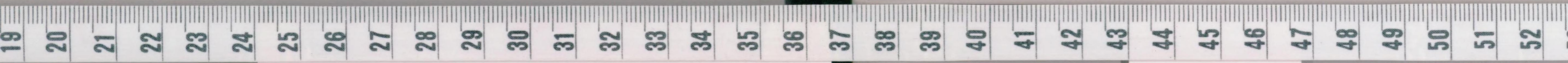




又凡り船四十二三あり過て二年  
正月朔、少重利加支所<sup>里</sup>に  
こころうと中家<sup>の</sup>の地、同月  
過て生家、滞船、生船  
積物、砂、種、毒、粉、毒、と  
其見、中家、同月、来、ち、可、少、重、利  
新加、軍、船、来、り、生、船、と、系

後、り、の、中、家、か、さ、れ、其、所、来、り、後、  
其、船、に、仕、立、物、を、張、り、大、あ、ま、に  
其、見、中、家、あ、り、始、終、船、便、長、と、  
生、船、の、言、之、明、り、子、年、一、月、十、日、  
亦、知、り、軍、船、来、り、其、の、後、  
十三、日、船、出、帆、里、と、内、ら、  
中、國、

は、所、ハ、ア、大、リ、カ、サ、ニ、ア、ラ、コ、シ、コ、フ、ヨ、リ、西、南、に  
ア、タ、リ、ニ、十、五、百、里、ニ、ア、リ、モ、有、リ、由









ちやうと中者匠をたつて  
日弁人來りてやま  
まゝ互に古師の術を  
名を世に傳へし  
軍船の主將の眼を  
眼をたつて内を  
中者匠逢ふより  
たつて

其の名を中者匠と  
たつて

千ヤツツ上海より南六十里方の由不案

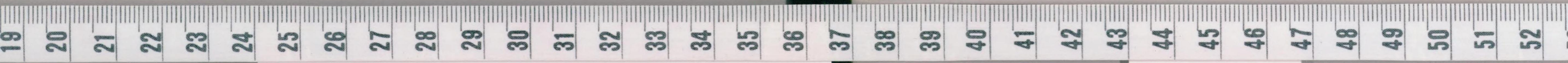
處をたつて南六十里方の由不案

と仰ふは眼をたつて

其の名を中者匠と

は後師の眼をたつて

川舟なる送りて





此の千ヤツツの多船を以て  
今此の遠くを御書云々年七月十日  
唐船我  
朝に來り其の多船を以て送  
りて其の物之餘の御書云々  
所長長船の上の御書云々所法  
通し御政を治す能く是れ

此の多船を以て御書云々  
隆公は是れを御書云々以上

正政二印年

正月十二日

小西米利加の日本と申すを  
千ヤツツハント云  
唐土國なるハ日本と申すを  
トウワント云



樽 瓶 千 五 百 石 積

攝 州 小 系 郡 大 石 村 松 屋

八 三 石 瓶

沖 松 頭

梅 屋

糸 井 屋

水 子

河 屋

梅 大 屋

森 代 屋

水 子 梅 屋

梅 大 屋

小 系

八

梅 屋

長 屋

日 屋

松 屋



白鳥

与を中

豫品

大古

海軍少佐

徳三坊

十人

多額に及ぶ

重利所船渡り定

揚品

流心

年三十四五

慶品

龜花

年三十四

揚品

七尾中

年三十三



都右之身人十七人

四人

系物

認後

長命は穉家者病死一人

安左守

持列

長命は穉家者病死一人

岩之巻

能事

唐土上梅る病死者人

四人

二十二年

此吉之身

能事



酒流入徳清の書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 徳清 and 酒流.

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 徳清 and 酒流.

















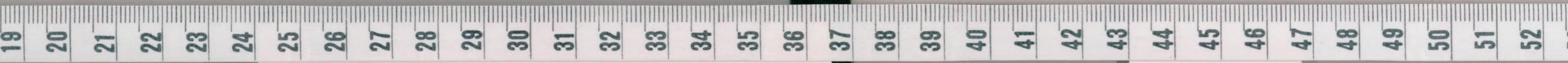




Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 10 lines of characters.



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 10 lines of characters.

















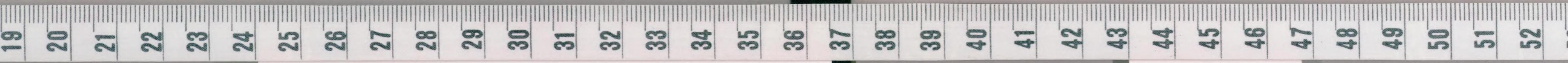




中子... 夜... 和志... 志...  
病... 志... 志... 志... 志...  
入... 志... 志... 志... 志...  
人... 志... 志... 志... 志...  
以... 志... 志... 志... 志...  
主... 志... 志... 志... 志...  
也... 志... 志... 志... 志...

清... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...

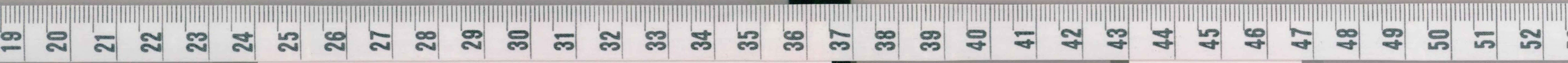
散... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...  
志... 志... 志... 志... 志...





チカヒトカ船名勝ハある西里利加同航  
カ船ハ四ツ堂形ヲ建方ニ倉長トハ  
おもふナリツク物ヲ食  
西米利加船ハ三階四階ニ乗ル事也  
本船ノ名亦此魚也ト云々包ニギヤ  
ノ明ヲ探ル事  
船ヲ所ニ入津仕滞ル事  
見交ル事作得共ニ箱ヲ船ニ積ル

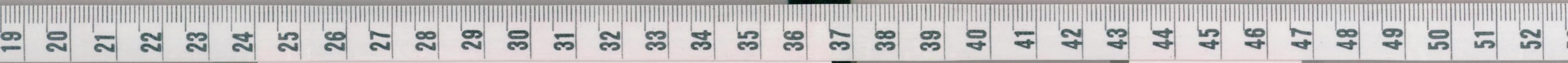
*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*





積歸り候へん程中、千ヤ、山、日、月、何人、  
之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、  
初、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、  
始、終、始、終、始、終、始、終、始、終、  
大、筒、筒、筒、筒、筒、筒、筒、筒、筒、筒、  
一、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、  
大、笠、八、九、日、本、同、様、之、様、之、様、  
之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

異、國、之、之、之、之、之、之、之、之、  
備、り、る、七、日、同、様、之、様、之、様、  
懐、中、之、佛、系、法、理、未、之、之、之、  
之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、  
冠、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、  
着、候、無、之、之、之、之、之、之、之、  
縮、袖、或、之、之、之、之、之、之、之、  
諸、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、





清産の日本より来るもの  
其の國より日本に  
出別送物ハ不有

唐土日本ノ物凡口積力ラホナイ  
限リ物ハ目交スル

始終西米利加トメキニコト左義  
下一、アメリカの内ニ軍船百艘  
ヲ多クイキリスハカニ百艘モ

西米利加より日本に左義ノ  
一切無唐産物ハ限ガケ  
作モ無唐産物ハ限ガケ  
何得ニ送ル

大衆人此産物モ成ル大入軍  
永く此産物モ成ル大衆人  
大衆強附ホモ此産物モ成ル  
新産物ハ自ニ送ル









土列難船入萬次郎帰朝紀事

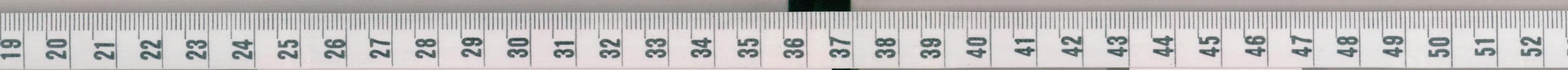
北アメリカ三十四州アリニ府ヲ又ヨークト云惣名スーインキラ  
ンシテイト云アリカを彼地をメリケト云。小名アランダ  
ノキンコ。テキシコ。ホト云云云。

一 烟筒發致ゆゑ年貢法掛あり 関次を完さくは至ハ  
地不夥あり

一 地下人諸多。物子代ハ一割あり 一列ニの頭  
ト五集之男子十五歳ニ年ハ限多。掛ル之は名  
ホックウキシロト云國之收也

一 刑罰甚鮮一色限ハらるゝあり人を殺シ  
たる者ハ死刑ニテ外ニ殺ハ殺をまゝニテ疑ハ之を不

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*





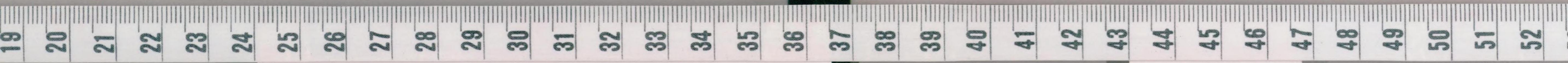
不<sub>レ</sub>建札をか<sub>レ</sub>日限と極め斯<sub>レ</sub>の仕業を彼<sub>レ</sub>者可殺  
の不<sub>レ</sub>殺りと云<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>せそ入札極のあ<sub>レ</sub>とせ<sub>レ</sub>殺れ多  
けま<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>ス

一 寺を十ヨイ。と云<sub>レ</sub>宗旨不<sub>レ</sub>僧といふ<sub>レ</sub>者も俗神<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>用  
も不<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>素<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>肉食<sub>レ</sub>は精進<sub>レ</sub>の時<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>もの<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub>冷<sub>レ</sub>奥  
島<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>陰<sub>レ</sub>ふ

一 寺の造<sub>レ</sub>り方塔堂の格<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>極<sub>レ</sub>のもの<sub>レ</sub>熱<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>三百人  
に<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>尺<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>日本<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub> 大<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>壺<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>つて<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>中  
佛<sub>レ</sub>像<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>毎<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>七<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>冠<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>もの<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>と  
祭<sub>レ</sub>ると云<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub> シヤハスロ と云<sub>レ</sub> 中<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub> い<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub>ち

内<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>裁<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>とも<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>慈<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>歌<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>坊<sub>レ</sub>坊<sub>レ</sub>各  
各<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>系<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>位<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>て  
何<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>冠<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>各<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>系<sub>レ</sub>  
こ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>路<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>諭<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>各<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>  
一 切<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub>丹<sub>レ</sub>宗<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>迎<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>途<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>宗<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>像<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>子  
こ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>制<sub>レ</sub>禁<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>これ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>迎<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>儀<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>も  
た<sub>レ</sub>抄<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>怪<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>惑<sub>レ</sub>じ<sub>レ</sub>人

一 人<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>棺<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>停<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>  
一 方<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>喝<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>墓<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>車<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>牽<sub>レ</sub>  
せ<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>土<sub>レ</sub>葬<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>棺<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>臥<sub>レ</sub>板<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>墓<sub>レ</sub>系<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>間





の吊のと云事を見ず

一人遊来客阿まハハ云と云て入てまハ腰掛にあり 右の手  
をおせむ客を太の手をかし 握り合せて互に挨拶する  
内ニ腰掛をおし 用済を成て泊る

一井の落石を扱ありハスッホンとてあちち桶へ汲込

一雪隠の穴をぬき内へ尻を落し入用を調ふ其内ハ古  
物扱持てんこと云滴りの桶箱あり 土を垢窪めたる亦  
ハ大小便をまら小便斗ハ小キ壺 滴て雪隠ハ移以  
て大勢人の入込場ハ桶を垢込て海をハ水捨と云  
作物の肥ハ鳥魚取して人糞ハ余り用ひて用ふ時ハ

海少してテて煙ハ入る

一畑を生魚雜喉<sup>キツマ</sup>新をひうけまきとしたりたる時お返し  
海と種を扱植付にあり 麦扱荷時ハ馬ハ毛色は少  
海にハ一と上を写に樹の枝付とてと行せて土をま  
海人

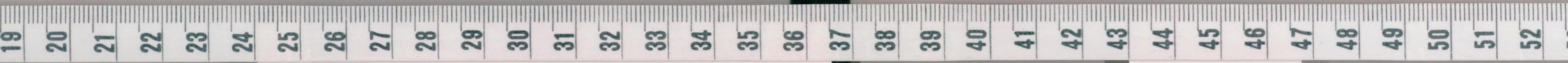
一畑代理業ハち抵日本ハからくる物あり 稲をあり

米ハ唐天竺あり 白米ハ海人 病人有財ハ漸お  
に横てあるハ彼地常食ハ麥餅ハ厚味なる物  
人ハ海よりハ米あり 病人ハ海よりと云  
そりあるハ表裏ハ違ハ



一 味噌湯も油あり 煮物、焙煎、塩漬之類の油を煮かき  
 大抵何れも油揚を煮るに随分油あり  
 一 病人有て醫師通る時謝礼定りあり 薬後の料ハ  
 薬の多少による薬ハ智る油菜之丸せ出も有り  
 一 水風呂あり 煎じて何れも熱病を煩ふ時ハ蒸氣  
 呂を搦て浴室に蒸せを発汗して治せると云  
 一 人生の時々一医師ありて何れも之を産後不判り候事  
 湯を浴せ候名親より付る火の穢き血忌ホの事あり  
 一 妻帯をせざるを自分女と見え忘る女ハ後得  
 心の時々向の親と自身の親と先夫より親れ是なり

住持(頼)住持より兩人を呼先聲へ向其方何某娘  
 を妻に教ス不其通ありやと官取娘と云ふ又娘  
 向て何某の妻に事や違世やと官取遠ありと  
 答夫も双方へ中候有し菓子をかき互に契約お淋  
 家に梅を植ふ婚礼の物ありと云ふ事あり  
 一 酒々ハイエテレ國を来り上堂の人を不飲下堂  
 面を斗り飲酒の名ホットツインと云  
 一 鯨船仕ありハ大商人を仲する事あり油の賣捌を本  
 國にて上油を本 船ハ日本の三休位之 代張を扱こめ此ハ  
 下油ハ九百文位之マツ鯨の油を蠟燭を格と云





一 鯨を突くと船を艘に六人乗じて以降二舟に突  
一 米麥等百姓より買つたを本福入藏帆の如き袋フセルと  
此以一丈いを何枚と定めて賣買此商人小賣の掛目  
を賣之

一 介量秤道金銀を以てある

一 人の年齢を教ふるに成年八月に生れ一人を子  
年十月十日本ノコに生れ二ツニ夕月と云ふ

一 乳少き女を子牛の乳汁と爲飲育之

一 筒の穂を左を右を見しとありやアメリカの肉又ツリータ  
の鼻より七十斗沖に小嶋ありそれへ的を掲て大筒

ホコ上手も五放三放の筒を

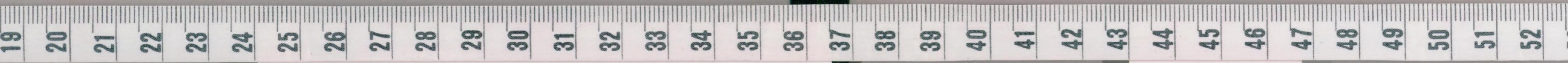
一 武藝の穂を右に木刀を以てする

一 火を有る時銃を以て消方をさす

一 平常時計を懐強砲の筒を放さしへばうと示  
れりや杖を突つて杖からうと示りや杖の内合

敏のある仕掛あり

一 麥蕎麥小判より柄のきき尋余り大鎌を以て  
を乃程宛るを難れ之を跡を以て海を以て人の扱ふ取  
物としてかきあつ先ころすみ車をつる踏廻フキマは杖  
仕掛らある





一 懐鉄炮は海より五分ハ長八寸位より筒は角鉄の心  
有く煙りも小豆程に玉十二入有一枚はれを玉あて  
川も元のとく煙り中かぶくり有て玉入りも煙り  
仕裁どんぐどんぐとしく川も霧の細工の折方ハ  
くそのの目尻も耳の根角先をとため合せておむす  
おもむき

一 博奕ありありの円は或る四方程の盤を梅平上  
に勝負す

一 牛羊豚蹄多の獸賣所

一 馬豚ハ草丸を切入り皮をたき割むを指す(まみか)

蹄ハ塩を入る之は使馬如形をれハ精氣強く豚々  
合用はあ肥を味しとあり

一 鳥類格別日本を替りあり鳥賊ハ大奴との  
あり沖合を鷄見遠しとあり

一 席駱駝尾長猿狐犬あり珍貴物之鳥獸大抵  
日本の通りの物を居る之作あり鳥類

一 象鸚鵡孔雀ハ天竺本唐ハ渡り

一 虎を捕はちり二尺四方位の鉄の延り板を張る板  
を拵りて猫を一人あると人にわするおを板を交  
留る肉眼ハ人の考ありて叙して名殺之皮ハ細



きひ肉の喰ふ

席人におもひ六咽笛を目笛と喰かる所を録す  
半よつておぼしと云

一 カナリカ開闢の今嘉永五子年と曆教一千八百

五拾二年之年号と云とあり一教と云年曆を教

四ヶ月 二十日 七ヶ月 二十一日

四ヶ年目一ヶ月廿九日一ヶ月有

一月廿九子十月ハアメリカの十二月に南ると云

一 十干十二支あり一四隅方位之十二方有

一 晝夜二十四時と

一 金をコラルと云通用金を一枚銀十枚と南ると云

一 銀をシルバトラと云一枚銅錢百枚と南渡の名を  
シエンツト云

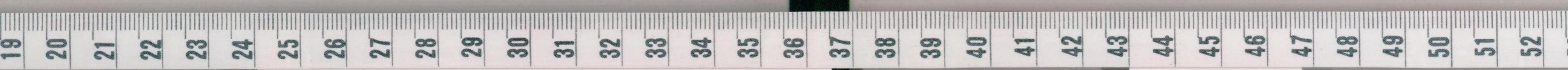
一 銀札をハマ子と云白紙長サ五寸幅三寸斗り

一 行燈提灯錫の筒子と云を作る燈心木綿糸  
を用也

一 紅粉白粉杯女の用也と云あり

一 白砂糖ハラモノと云木の皮を切目と入れ汁あを  
よめて鍋に入れ煮れば白砂糖おまると云

一 桶新に作るあり檀木を削ぎてあり端をハ鉄の延





つらる地

一 蒸氣船の船底に火を焚き煙り多白を廻せを各

車ありてこれを牽引する船此よりいへば船の名

にチニホルツと云又陸を以船と云 名レイロウと云

貨物を運ぶ大なる船の跡あり長三の程の形

他りの箱をつつも引せりとい通る道筋ハ鉄を車

道に敷てあり尤送り継場の驛あり 本船長

サセ間より五拾百位あり

一 状の性還飛脚を用ひて下と上指を立又針金

を引張付あり 針金を傳ひく文箱伝来なる概

かぶりの仕掛あり 是も早よりなる如し 是は送継  
ある人

一 織物の機本綿の糸を引車 杖あり板を引掛

かぶくりなる概あり

一 店屋ハ石硝子の障子にて用ひて内は透あり

有見するあり物

一 傘の形日本の巨し尤大なるあり本綿を注堀り

骨ハ鯨のヒラキを合相ハ羅砂

一 外療日本同一灸の法なるあり病よりて腕

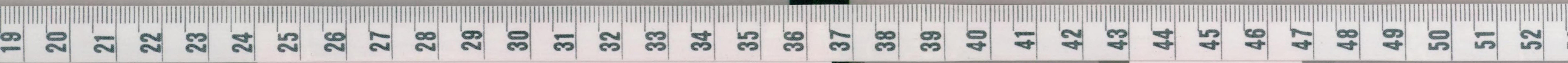
血を流す見たり

種痘彼土にもあり 天然痘感せざる



- 一 南アメリカの南の鼻あり、瀬戸の上手と動うさる雲
- 一 ツツ有白雲とツツ黒雲とツツりつても有ると云
- 一 彼土に北極星はあれど南極星はありと云云
- 一 ウツフ國の辺りハ年中丑寅の風斗吹と云
- 一 裸島キンメルグループと云殊物あり石を以<sup>脱アルヘシ</sup>及物とし
- 一 船とも化る丸木の肉を彫て長三四斗も有船あり
- 一 外の遠見を其六獣の皮より造る板を見ゆと云
- 一 又ヘッリフダの長崎を船路日本道より一万四五千
- 一 里をゆくと言日本一里を二千と定と云
- 一 小アメリカとメキシコ國との中にてキミタと云國有り

- 一 夫を双方奪ひ合て戦争に成南方は鉄砲を打ち合
- 一 七日の道一里より沖の船中を遙に見ゆ諸人
- 一 殊物といふは戦終にアメリカが勝ると云
- 一 何者或は何尋といふゆは諸人何人といふの教とい
- 一 喝問の場ハ竿有し其丈拾六尺寸は石と<sup>ボラルロ又</sup>
- 一 <sup>ハフアデス</sup>云
- 一 一尺八寸日本曲り金と同一寸<sup>ホノコ</sup>上人因取之尺の名<sup>メジアルウル</sup>と云
- 一 何尺の尺をスラットロナチインチの<sup>ホノコ</sup>尖をとテシガ
- 一 アメリカ天竺の島西<sup>紅海</sup>シレの近邊にチシカアト云島あり
- 一 此島の人女房を数人娶る地一及あれを妻を人を娶る













Handwritten cursive letters: E, F, G, H

Handwritten cursive letters: I, J, K, L

Handwritten cursive letters: M, N, O, P

Handwritten cursive letters: Q, R, S, T

Handwritten cursive letters: U, V, W, X

Handwritten cursive letters: Y, Z

Printed block letters: A (エイ), B (ビー), C (シー)

Printed block letters: D (ディー), E (イー), F (エフ)

Printed block letters: G (ジー), H (エイチ), I (アイ)

Printed block letters: J (ジェイ), K (ケー), L (エル)

Printed block letters: M (エム), N (エヌ), O (オー)





天	ヘブン	地	オヱツ	人	ヒラル メイト	日	シヤシ	月	ムウシ	星	シタア
年	イエ	時	タイム	春	シブテン	夏	シヤ	秋	フトム	冬	ウイシタ
東	イシツ	西	ウエシツ	南	シヤウス	北	リウス	青	フルウ	黄	マアロ
赤	レエー	白	フハイ	黒	ブライク	暑	ハット	寒	コウル	雨	クテウ
雨	ルヤシ	風	ウイン	雷	サンダ	晝	デイ キウ クイ	夜	ナイ	朝	モフ子 ン
暮	イアチ	石	シトラシ	山	ヲアンタ	海	シー	川	シレハ	木	ウラリ
火	フハヤ	土	クレタ	金	キエシ	水	ウクタ	男	メエシ	女	ウラメン
父	ガハア	母	マアサ	子	チリシ	貴	ハイ	賤	ロウ	主	マアンタ
家	ウライ	老	ヨウシ	幼	ヤシ	兄弟	ブラサ	姉妹	ヒシタ	頭	ヘエツ
顔	ペイシ	耳	イヤ	目	アイ	鼻	ノウス	口	マウス	手	ハンタ

Handwritten cursive characters (kuzushiji) corresponding to the kanji on the left page. The characters are arranged in three rows, with some characters appearing multiple times in different styles or as variations.





足 レイギ 指 セニガ 爪 クノイル 舌 タシ 齒 ヒイス 尻 ハイシ  
 男根 オノネ 女陰 メニ 夫婦 ウツス 腹 ハラ 胸 ムネ 大便 オシエツ  
 小便 オシエ 思 オモフ 聞 キク 見 ミル 言 コトバ 勤 シマア  
 喜 ウレシ 怒 イラケ 哀 アハレ 樂 ウレシ 笑 ウツク 泣 ナク  
 涕 ナミダ 唾 シツベ 立 タテ 坐 イマス 走 ハシ 智 チ  
 愚 オロシ 恐 オソシ 問 トイ 否 イナ 甘 アマ 苦 ニク  
 辛 ツマツ 酸 シヅ 強 ツヨク 弱 ヨク 痛 イタ 痒 イツチ  
 瓜 ウリ 血 チ 病 ヤマイ 臭 ニホ 新 アタラシ 舌 シタ  
 輕 カサ 重 オモシ 右 ミドリ 左 ヒダリ 前 マエ 後 アト  
 上 ウヘ 下 シタ 打 ウツク 突 ツク 切 キル 喰 クハル

吞 クハル 忘 オシワス 學 マナブ 覺 オトシ 寢 イダス 起 オキ  
 家 ウチ 捨 スツク 拾 ヒラキ 馬 ウマ 牛 ウシ 犬 イヌ  
 猫 ネコ 鷄 トリ 己 ミ 返 マゼ 人 ヒト 敬 ウヤマシ 場 バ  
 産 ウマユル 子 コ 夫 ウツス 妻 ウツメ 佛 ブツ 道 ミチ  
 盜 ヌス 入 イ 食 クハル 鉄 テツ 砲 ポウ 玉 タマ 弓 ユミ 櫛 シ  
 楫 カヌエ 擢 ヒキ 油 アブ 羅 ラ 紗 サ 師 シ 匠 ジヤウ 矢 ヤ  
 刀 タガナ 庖 ウチ 舩 フネ 車 クルマ 帆 フナ 文 フミ 學 ガク 教 カウ  
 丸 マル 方 カタ 角 カク 時 トキ 計 ケイ 火 ヒ 小 コ 鯨 クジラ  
 坐頭 ザツ 鯨 クジラ 脊 セナ 羨 セム 鯨 クジラ 正 マサ 月 ツキ 二 ニ 月 ツキ  
 三月 サンゲツ 四月 シヨウゲツ 五月 ゴゲツ 六月 ロクゲツ 七月 シチゲツ 八月 ハチゲツ



九月シウゴ十六日ラット十六日ラット三月サイセニ

嘉永五年 第次第 帰浦中 演浦庄屋形代

窪津浦庄屋 急ぎ 権助へ 申書之 作付 凡浦より

善妙ノ字

米利輸渡管後

往年 米利輸渡管後 吉川郡 宇流浦 漁人 傳

蘇同 房子 石島 嶋多 郡中 之 候 米利輸渡 此 及 物 玉

船 一 所 陸 家 水 渡 而 後 船 一 所 物 諸 在 の 如 し

和 大 三 人 去 天 保 十 二 年 五 月 五 日 傳 書 牙 重 助 同

所 賞 石 島 嶋 合 子 人 中 右 左 二 丈 八 尺 の 漁 船 又 白 米

等 半 依 用 意 以 申 了 旨 日 四 百 五 十 字 傳 浦 出 帆 高 十 四

五 里 下 之 方 之 津 之 舟 又 船 中 及 又 船 上 之 船 一 所

之 船 在 釣 一 所 之 獲 物 廿 三 又 下 之 方 十 里 之 岬 之 中





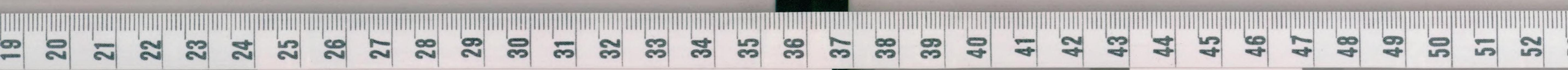






ふれし其のなしき事いへんか多るく同回り  
りくおあ口へいれり得た心は同くして彼を九郎  
の多くあり。を流して折敷したべり水は苦みの  
多有り有を空手血破損の柳打揚着梅亭の  
をもつて取留式に面をうけ先を飲中他を投死  
たんと思ひつるに幾度かは他は得た又思ひ出  
せるよにいきや内よにふるもつても有らんを如  
か交月白を送り中にも其能復の季候も色秋の  
時分彼を九郎は身よぶくお事儀は主人這上り

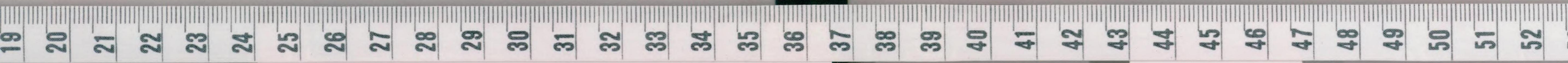
飛去り骨食物食しく或日玉を懸り新波船をお建て  
し歳人登り演説を笑ひお三四町程登り皮廣き厚地  
有る石を田置多る古井あり此は流石方を里斗り  
ありては見えへり後よありし時先は在り人  
流るゆに日本不百餘里東よお南より他は以て重ゆ  
是は病の氣味起り同言より平対過る重病は  
未成中の傳を病もなれ病弱ありし未成は病れ病後  
唯重ゆの病の病の病は病の三人は病を病を病  
等を反杯仕一日の食物を病へり金子六月の七





月の夜を本覺未時分三日月をぬきて二十一年の後の  
曉に舟取の洞窟を出展己の方を本覺の方を遙  
し帆船を見付た所當の海に五名ありも立出見やう  
凌大なる吳の船を以て舟小近寄る聲を限り  
又揚發換の船くせに長船をくくり付たり招き候  
旅人有三艘を兄せあけし彼船小舟二艘あり  
親船の大帆をたらし候を入し候子そ船の右天了  
船内へ向し傳來る候又先方も笠をもちてせし相  
を杯致し候大心と祝ひ是れも舟を磯近き所へ

立寄る候も其船を以て舟長船を以て入る  
付願す來れし以て候成り候も見られし人  
所氣味あり候といひ候し候成り候も彼人  
の舟根の出せく候し候し候し候し候し候し候し  
なま裁と言候成候子以申し候洞窟の方を指し人  
所り候候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
を尋ね候候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
申し候し候し候し候し候し候し候し候し候し候し  
以し向の口へ入候し候し候し候し候し候し候し候し







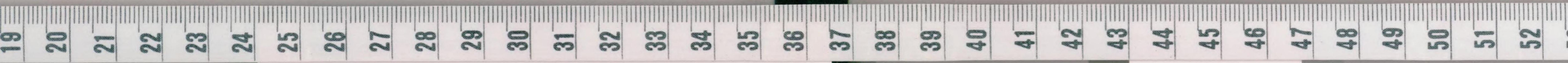






更美次郎義ハ刀イキセビ水軍とて中園へ連行度匠  
中守新次郎の心は事と事平の道方いふ事  
可中同御守をいし中守名四人の者へ中守義新  
と彼義新中守又と出帆多し此時美次郎  
十四歳小次郎中守と彼リヨ一途中役人辨め人小  
の預返し世傳ふ成く若くは徳も通し中守  
一更月日と送り死なす事得定定夏の以か  
以てと云語かきし事一ありの事とて粗差  
此中事し世傳ふ成く此義新の毒もねおる事  
の

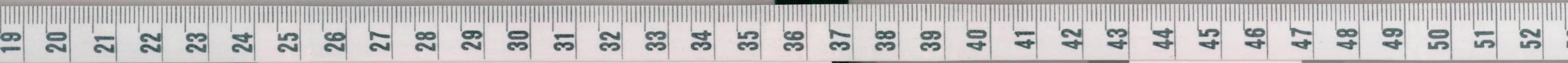
働才しし一度後中守を新しり人の事  
其後中守及心死すし世傳ふ成く此義新の毒もねおる事  
同守後又一更年除くも此成る何分おる事の働才  
後中守一更年除くも此成る何分おる事の働才  
働才いふ事と事平の道方いふ事と波平除  
お説し事あると持りの物いふ事と事平の道方いふ事  
傳説中守名義新と事平の道方いふ事と波平除  
お説し事あると持りの物いふ事と事平の道方いふ事  
傳説中守名義新と事平の道方いふ事と波平除





とお座をれ返く女子を蔵やよき物りヨ一の  
お座をぬく漬よりらま斗りまの方コウロシとま  
短一糸り百粒テツテとヤ一の方と若きは醫師と  
遠く若きは侍を若くぞく御痢疾の届くお蔵  
末の正月ぬり病死信近辺の人とさ句く葬り  
司ハハコと中僧葬の人よ葬式の教お頼ひまは文様  
とまのを漬なるとは多は預りお板よ入カシ子  
はと中短く葬りやよお地風俗り精進や法る杯  
とららるるおと侍を心持とぬ精進は墓集りは信

是より先ず或人可ハシとヤ一の若き育ぶ歌り法ま  
はまカシカケテリとヤ一の若くや殿様ハハハの漬より  
巡見とくくお蔵のまら右可ハシと家よお蔵を  
ま見やを御前もらお蔵とまの教多は預りまお  
若くお蔵の教法とお蔵りや上何年少一の耕  
作は若くお蔵もらお蔵もらお蔵もらお蔵もら  
は何のお蔵もらお蔵もらお蔵もらお蔵もら  
は田地死分と預りまら先ず一合漬也の明地  
一間の家と建耕作もらお蔵もらお蔵もらお蔵もら





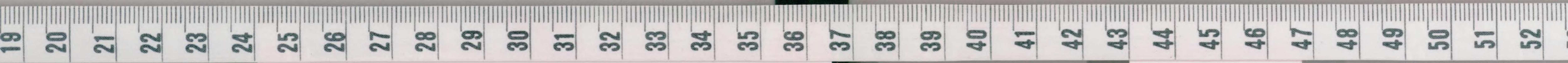
ゆく釣一 魚り揚し 松魚と多く 釣獲中の如  
所の人十為りるや 口十位物一の都くのる  
日中人より 意用成物ゆく 指先より 小魚りや  
ら多びを 意用成者ハ 揚きく 同と云ふ 支波一  
ゆるし 肝心致ゆるし 有るは 作おハ 皆芋の如ふ  
て 船中 波り 首おの 揚り せし 且村後人物の如  
く 人別 政者 其意 十の如く 心との 者ハ 浪波を 長  
後人 且云出 一ハ 作法 小の 揚き 是おの 出法 小  
及らば 釣の 意 然ハ 四辻の 意 市者 且 処 揚出

賣物仕 光陰と 送り 中 あり 處ハ 被 借の 人 三 匹  
方ハ 小 鹿 集り あり 三 匹 三 匹 中 法 法 の 柳 蔵 者 其  
解 集 の 中 あり 小 鹿 一 匹 其 方ハ 被 取 と 忘 死  
多 里 居 しく され なる 見 一 人 被 引 け せ じ 中 出  
彦 一 人 見 忘 れ 一 人 命 の 親 しく いる 者 とも  
あり 一 人 の 礼 謝 一 人 述 重 傷 の 死 せし とも 老 知  
被 引 け 慈 救 の 神 一 人 水 主 以 命 一 人 引 け 三 匹 一  
三 匹 一 人 者 其 方ハ 被 取 と 忘 死 日 中 近 也 出 海 する 中  
多 里 居 しく 復 取 一 人 其 方 被 取 と 忘 死 日 中 一 人 送 り



一平一將のふたつとも人となす人と成たり此を巡りて  
故々の意愛思ひの元重なるの情事なり其時節を  
拙者故國より訪ふ所未だなく候も其の事又此後  
必重なるに申す事二人の意は海國の用之候べし  
「キヤン」の「カ」に此の字種を頼むは此處しと其の  
中同道より彼津道へ来り申す所を見は肩を叩き  
免し、傳説の所合し、ある梅を後裁し、おこ  
風雅成りし伝説とらち節ひ是迄の事し、いと  
傳説より其の事知らぬと申す、いと其の事し、

漆へ来る處しと浪浪抄校くれ立出山に將立る事  
津口へ来りぬ「フチイセ」に早速出逢ふ所、二日日本  
ゆられ是れなりと申す、来れとて、羅紗の衣敷  
とて、先きの物と替ひし、荷捲ひゆり、先き津  
大よ候ひ別「ナ」の津へ来り、室右衛門の對面、由緒  
の約束仕心、安き人、小帳乞ふ、洞と傳へ、お別  
き彼の「リ」ヨージ、より、よく、陳別、其の更、之、舟、仕、  
「フチイセ」に「キヤン」の「カ」に、忍見、其の、事、と、頼、み、  
を、傳、へ、ハ、フ、チ、イ、セ、に、お、急、と、申、し、別、船、に、お、頼、上、  
候、









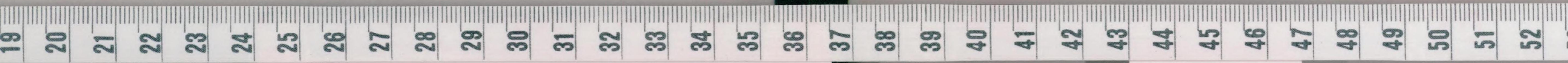
鯨漁は日輪の光り成見ぬの四十日斗りはして南へ  
去りし十月の比川口赤しよ海の中ハキヤランカーに  
乗るの毒もあひし物もあて又使便舟もあはれ送る事  
お別れ見事と候は相違次第も来利幹「フイチ」  
宅中成長いふも一々度目玉「フイ」人（フイ）  
鯨漁舟も来利幹「フイ」船見事いふも一々度  
お別れ見事と候は相違次第も来利幹「フイ」  
宅中成長いふも一々度目玉「フイ」人（フイ）  
鯨漁舟も来利幹「フイ」船見事いふも一々度

ひさしく其後と候へ川十口「フイ」船見事いふも一々度  
帰りの「フイ」船見事いふも一々度  
居るに候は来利幹「フイ」船見事いふも一々度  
ひさしく其後と候へ川十口「フイ」船見事いふも一々度  
帰りの「フイ」船見事いふも一々度  
居るに候は来利幹「フイ」船見事いふも一々度  
ひさしく其後と候へ川十口「フイ」船見事いふも一々度  
帰りの「フイ」船見事いふも一々度  
居るに候は来利幹「フイ」船見事いふも一々度



世に小舟の南へ来りし一「キレシメテ」とりて舟に坐りて  
浪のはらりと舟中へ宵にやれど裸婦と習ひ  
けり山をこえり字をよみし舟にのりて足中は是言  
椰子の皮をまく舟に其妻と名を食はば道近道  
の事なれば其妻と名を食はば道近道  
椰子の皮の中よみしけり此の由に女に言ふに男女  
とも小舟裸婦と名を食はば椰子の葉と名を食はば  
小舟の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば  
椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば

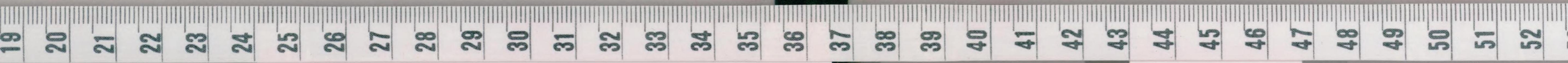
舟と名を食はば椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば  
又椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば椰子の皮と名を食はば  
椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば椰子の皮と名を食はば  
舟に男女とも海と名を食はば椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば  
女と名を食はば椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば椰子の皮と名を食はば  
椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば椰子の皮と名を食はば  
三月以て五月に及ぶと名を食はば椰子の皮と名を食はば椰子の葉と名を食はば  
人為に亞細亞の舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて  
舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて舟に坐りて





少中「不又いふ」より奉行と無き日本の西南  
六百里計りく如極十二三方く和らぐ家少く  
二十日計り滞り新水と取入成まぐり入衆せし  
東へ轉り日本の仲百里計りの事と東へ渡れ  
一四十度後く如と南へ衆「ウロホ」の邊く衆は  
丑のめりく吹風と成され南へ衆「バグイト」の角計  
けと一衆に志航は舟停り古里計り三十七方  
後小舟い入りの港へく入れ西細西に突けり  
さん衆い多く芽芽しく夜次波をいきり又風

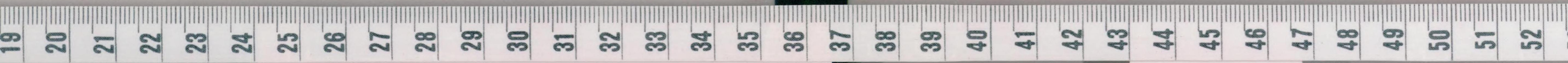
少く一衆莫味利よりせめと無く舟所より二十  
日計り滞り新水と取入成まぐり入衆せし  
司サセ「ウ」の國へく衆「バグイト」の邊く衆は  
のちく小舟停り其留りく書二物死し一其居は  
長し一衆一見舟到りく為「又ヨテ」と云都  
へ沙紙と一衆一私と私大之可しにと一入乃如  
「子エ」と云女師進小入門為波と頼をけしと一衆少く  
横文字の衆の如くあり四十日計りは「ク」  
せし後書と衆、運ゆりは港より六里く如く南





里の三ノカント子に生じたりと云ふは田圃買取門扱の事  
深き可成り也と云ふは一はと云ふ同年十月に  
アリスに人けりて其術を地理測量に用ひて導  
方と雖も其ノイナセに世に傳へて入りて翌年四  
月迄に在りし事一同年七月にイナセに又録  
取して一はに方ニヨリて其術を頼じりてとて  
十ノカントに生じたりと云ふ事一はと云ふ事  
付られイナセに妻と其姉又先妻其娘と云ふ  
四人は同姓の事一はと云ふ事一はと云ふ事

前段の測量指南と云ふは又入門は翌年己  
酉月迄は其の由イナセに其術の事一はと云ふ  
ホウに其術の事一はと云ふ事一はと云ふ事  
是れ其の事又三ノカント子に生じたりと云ふ  
法と云ふは其の事一はと云ふ事一はと云ふ事  
用は其の事一はと云ふ事一はと云ふ事  
中ノ法と云ふは其の事一はと云ふ事一はと云ふ事  
其の始末と云ふは其の事一はと云ふ事一はと云ふ事  
イナセに生じたりと云ふは其の事一はと云ふ事一はと云ふ事

















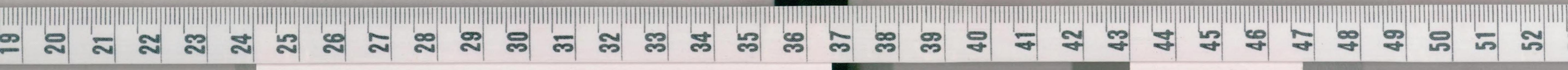
みいそく物——此國を又首長ありて納税之代年  
四月南米利幹の内「コロチ」の邊に足松付て  
「スリヤ」を死すく風俗「伊斯把泥」の身よりして  
座の邊に船の地より八日斗り滞り新水  
を洞へ罷帆六月比北アメリカの内「ガラウ」に  
変りて是邊の海の大邊より高山ありて  
向て今無き船を傍受其邊の傍に舟一枚  
り入海を百の程ありて湖にせりてどしどし如  
是きより上陸島を傍り諸道果を終りて山を

登りありて有里斗りてをぬきて言はれぬ  
あを食はるのこにゆるる夜のゆへに  
あるにやとありて山の上大川に  
南川中川北川とありて山にありて金  
堀にありて山にありて山にありて  
やうにありて山にありて山にありて  
雪ありて山にありて山にありて  
山にありて山にありて山にありて  
山にありて山にありて山にありて  
山にありて山にありて山にありて



お勝りなる懐埃地より 報せられぬゆゑに由は  
山中より虎を見せし七十日なり滞る金銀  
お勝り堀え元のどくく「セクリラント」の「サリウニセ」  
は金山今ありお勝り米利幹とメキシコと此金銀  
はより昇降を遂げし金銀及び其高水車  
を仕置る徳川も堀り時沙金物を見せし御手  
お勝り後徳國へ船書をもし御手堀り  
中後はお勝り只今の金山ありお勝り法武  
此山中陸路た言科の運上米利幹とメキシコは

政しりせよと利勝後存の如く徳國の船をもせ  
し由は山中より元米利幹も食物をせん山下へ  
持運るよお勝り西洋東洋 亥年 徳勝り  
まゝる國を清玉の人多く使はせしり  
来たり日本よりと此船は船長 長崎 御手  
直り徳國の古代金山の船より一舟の  
お勝り船へお勝り十月比お勝り米利幹に  
亥年お勝り海防の志よりお勝り陸路  
お勝り海防の志よりお勝り













方へ身羽多事至正月琉琉沖三里斗り小玉島  
仕り別波不初<sup>ツ</sup>下<sup>ツ</sup>一人系<sup>ツ</sup>物<sup>ツ</sup>地乃<sup>ツ</sup>漕<sup>ツ</sup>高<sup>ツ</sup>  
大坂漢ハ日。樂國<sup>ツ</sup>よ<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>事<sup>ツ</sup>力<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>子<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>有<sup>ツ</sup>是<sup>ツ</sup>より<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
系<sup>ツ</sup>付<sup>ツ</sup>心<sup>ツ</sup>得<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>初<sup>ツ</sup>野<sup>ツ</sup>以<sup>ツ</sup>所<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ホ<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>出<sup>ツ</sup>帆<sup>ツ</sup>高<sup>ツ</sup>  
幸<sup>ツ</sup>使<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>以<sup>ツ</sup>米<sup>ツ</sup>利<sup>ツ</sup>幹<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>イ<sup>ツ</sup>キ<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>方<sup>ツ</sup>へ<sup>ツ</sup>書<sup>ツ</sup>状<sup>ツ</sup>差<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>  
長<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>聖<sup>ツ</sup>活<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>殿<sup>ツ</sup>辰<sup>ツ</sup>礼<sup>ツ</sup>謝<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>函<sup>ツ</sup>聖<sup>ツ</sup>色<sup>ツ</sup>多<sup>ツ</sup>道<sup>ツ</sup>具<sup>ツ</sup>未<sup>ツ</sup>友<sup>ツ</sup>  
遣<sup>ツ</sup>飛<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>分<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>これ<sup>ツ</sup>是<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>類<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>イ<sup>ツ</sup>キ<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>娘<sup>ツ</sup>へ<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>名<sup>ツ</sup>  
河<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ぬ<sup>ツ</sup>今<sup>ツ</sup>遠<sup>ツ</sup>ふ<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>ぎ<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>縁<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>縁<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>得<sup>ツ</sup>者<sup>ツ</sup>古<sup>ツ</sup>今<sup>ツ</sup>  
親<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>定<sup>ツ</sup>め<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>存<sup>ツ</sup>命<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>わ<sup>ツ</sup>さん<sup>ツ</sup>親<sup>ツ</sup>親<sup>ツ</sup>差<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>子

多る道のたなま<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>何<sup>ツ</sup>き<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>ぬ<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>書<sup>ツ</sup>送<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>家<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
又<sup>ツ</sup>出<sup>ツ</sup>状<sup>ツ</sup>使<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>お<sup>ツ</sup>徳<sup>ツ</sup>丸<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>イ<sup>ツ</sup>ツ<sup>ツ</sup>モ<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>に<sup>ツ</sup>及<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>親<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>ウ<sup>ツ</sup>ホ<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>小<sup>ツ</sup>  
孫<sup>ツ</sup>立<sup>ツ</sup>可<sup>ツ</sup>シ<sup>ツ</sup>セ<sup>ツ</sup>ウ<sup>ツ</sup>エ<sup>ツ</sup>ル<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>米<sup>ツ</sup>利<sup>ツ</sup>幹<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>差<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>ハ<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
琉<sup>ツ</sup>琉<sup>ツ</sup>近<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>尾<sup>ツ</sup>尾<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>古<sup>ツ</sup>今<sup>ツ</sup>へ<sup>ツ</sup>帰<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>て<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>宜<sup>ツ</sup>傷<sup>ツ</sup>つ<sup>ツ</sup>  
孫<sup>ツ</sup>辰<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>笑<sup>ツ</sup>河<sup>ツ</sup>平<sup>ツ</sup>使<sup>ツ</sup>初<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>物<sup>ツ</sup>類<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>勸<sup>ツ</sup>丸<sup>ツ</sup>是<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
親<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>之<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>イ<sup>ツ</sup>ツ<sup>ツ</sup>モ<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>海<sup>ツ</sup>を<sup>ツ</sup>怪<sup>ツ</sup>し<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>列<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>三人<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
陸<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>神<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>見<sup>ツ</sup>届<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>成<sup>ツ</sup>美<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>力<sup>ツ</sup>へ<sup>ツ</sup>冥<sup>ツ</sup>帆<sup>ツ</sup>仕<sup>ツ</sup>る<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>之<sup>ツ</sup>ツ<sup>ツ</sup>摩<sup>ツ</sup>大<sup>ツ</sup>仁<sup>ツ</sup>  
切<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>ぬ<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>ら<sup>ツ</sup>詞<sup>ツ</sup>不<sup>ツ</sup>類<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>修<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>可<sup>ツ</sup>呼<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>扱<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>  
孫<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>役<sup>ツ</sup>人<sup>ツ</sup>中<sup>ツ</sup>も<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>立<sup>ツ</sup>舎<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>吟<sup>ツ</sup>味<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>御<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>孫<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>也<sup>ツ</sup>



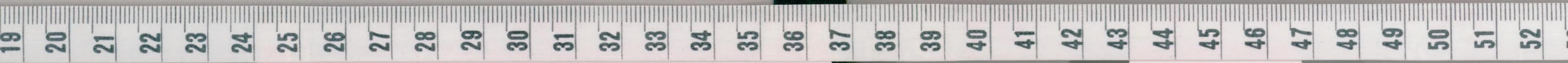




癸卯七月十一日高知城より入る

一帝王平地人あり細細異なりふり凡七海あり  
帝王其人司ワホシナアヒ川ワヒモロカヒモフイモロ  
可トワヒモヤハ都府司ワホシの也川ナロモヤ如もく  
近年一むく繁花も盛れ女町等も有るソヤ  
入津絶なり七海あり凡金銭拾万枚其六万枚  
本地の王カニカケナリ所領も盛なり六万枚も  
米利幹より多し病ハ行神の人列フタリヨ  
テハ所領も盛なり凡金銭拾万枚其六万枚も

多く人を救ひ自づから奉行の地平歳本地も多  
頗る盛なり是所甚ぶるも一も徳山も一既海の途  
中ハ所領も米利幹より多し病ハ行神の人列フタリヨ  
ハ英吉利へ取付を任斯波ル仲承知せられ  
小國ハ所領も何れへも属するも一も盛なり  
は地ハ所領も何れへも属するも一も盛なり  
ヨリ仕来の者ハ救へ後者有るハ安きを拂ハ  
行途ハ所領も何れへも属するも一も盛なり  
所領も金銀の飾あり馬の上へ一

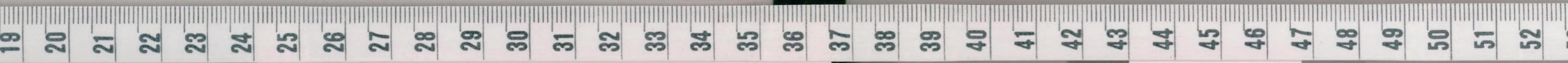




徳東に海軍都と七島山とて聞ふ砂地を爲す  
殺伐せし勢に茅葱の根を掘りしと言ふ十二万橡葉の  
金沙を多く入津の方玉取りし上りに限るを  
山食肉衣類多く米利幹人の貿易ししは食を  
妻少く製糸の河にとちわゆく衣類米利幹人の  
筒袖仕羅河のおもひ多きをいふに立し不昌宗  
より糸の編みし笠を志住本は女子後を夫人と  
と爲いとち製シラの柳小仕屋多き家他多く米利幹人は  
板屋根甚るを根等よく石を根を尾の柳不庭

製したりわゆくつやを禽類草木格別日本に  
ふちの一種の木は木の皮を氣候は暖れ光四倍  
りちを

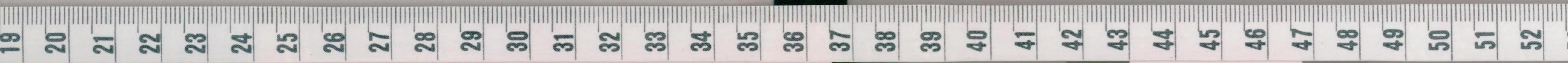
北米利幹人が更細更なりよりふちを六倍きり  
元首映詰利より更細なイギリに種の人多く  
更なる人より多く眼を少く黄をぬき  
四時を海を煮くききりしや小極三十九  
度なる木の所より有た言山を脊を負きたり  
五、六代のは玉とヤルに学問文智者有るを標





此一王不歳四年シ又他人小讓の政変  
能行而元人の懐ふ人おを手強を以て又八年  
王位小無を以てシ煙き昔シの力シ性来小通  
行の馬平シ譲り長者多人馬の後を以て他人に  
懐の隠居はシを在位シの一日小金海子部百狩り  
物納波シ其儲を以て一生を示す昔シの彼人  
神の人もシ得共權威を以てシの力シ  
いづきの彼人よりシ知きシの兵今シの王に引シに  
いふ年シのメキシコ國と金銀シの地海方シの合戦小

おまのいし時行の手の大将シ石火矢を以て教陣を  
お駕り馬を以て又人衆を以ての力シの謀を以て  
操めおシの大小お術評判見シの可敷お智者  
おく人民お懐を以てシ王の讓りを以て其兵にキリ込  
種の人を以て英吉利よりシ兵を以て國を以て  
昔の國を以て英吉利幹の力シの一種理ありて  
り以てシ英吉利政変の力シの力シの力シの力シ  
立振おなシの力シの力シの力シの力シの力シ  
いが合戦の始シの力シの力シの力シの力シの力シ



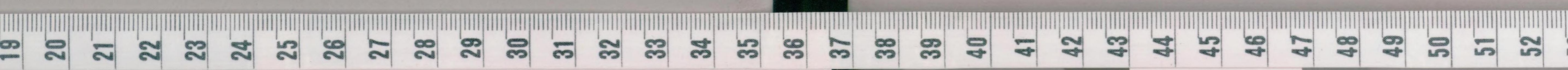






米ハ市度清國南米利幹ノ交易ハ一  
同屋有シテ得テ味あや死物ト人ノ力増テ  
食メハ化病入ルハ漸ク海ノたぐハ中ノ  
本邦も以テたぐハ中ノ多ク見テ倍々  
一切其ノ麦ト米ト金博ノ様様トテ我  
中ノ衣類ハ西洋風トシテ羅州新  
定ノ其ハ中ノ多ク其ノ好ハ一  
ト得テ鏡切トト希ヤ中ノ是ハ西洋  
名用ノ其ハ中ノ多ク其ノ法トシテ  
由アニヘテ其ノ物

編多ク其ノ品米トシテ渡リ美トシテ  
其ハ中ノ多ク其ノ法トシテ其ノ物  
家凡シ西洋風トシテ其ノ好ハ一  
一ニ階ニ階四階トシテ其ノ法トシテ  
曲ハ其ノ中ノ多ク其ノ法トシテ其ノ物  
焼石トシテ其ノ好ハ一其ノ法トシテ  
テ製トシテ其ノ好ハ一其ノ法トシテ  
板ノ其ノ羅州トシテ其ノ好ハ一其ノ法  
マセツセ山ニスーハッホ山ハ方國船  
アツク





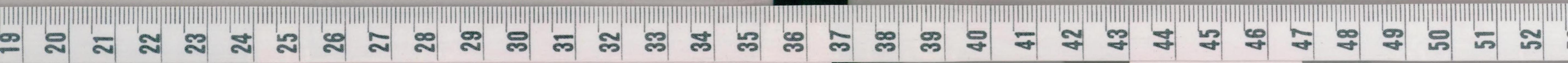




此の如く不キリスに属するものありアメリカに  
船の仕立所軍船を中にして押寄ると風波が  
又不キリスの事も多し其理を中欠りしう送らせ  
不キリスに來るに在りて海客の船を中  
乱防に依りて大軍攻來る事あり也中身より不キリス  
に謀略をもしに防ぎ難し遂に六月四日大に捕  
是より百餘歳の大戦を以て其例を以てしに能  
とやろしと云ふ

毎年寺院に納金あり十二ヶ條の法令を傳へ

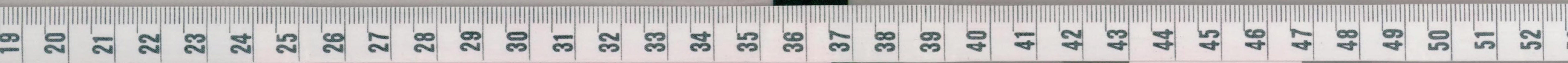
才一の親を大切に勤ふ一人を善むべし其  
と憐し人妻と其屋を以て兄弟親類中絶せし  
盜海をなすもの多し其理を以て其例を以てしに能  
身生ありしを捕らむ罪人の其成りて罪人を皆  
大なる困りあり一人の侍りし所を以て其例を以てしに能  
政界の権を以て其例を以てしに能  
獄におもひ人の製し其教く其理を以てしに能  
死刑を以てしに能其理を以てしに能  
と云ふと云せ下のせんと極り得る人らより其理を以てしに能





とくくやうに侍をて教へし由縁一は及のあり  
後より侍を侍人といふ侍上より侍長及より  
侍長一由に侍上  
主人より侍長と世より侍人といふ侍官位侍近  
侍中事終りて侍人の子を侍の侍長と侍  
子にあり侍人の子に侍  
米利幹の人御かより老より近習女たの侍長  
ト侍人の子に侍人の侍長と侍人の子に侍  
新侍人の子に侍人の子に侍人の子に侍

ハ親と連一ハ侍と侍人ハ侍院侍の如く侍出  
夫婦と侍長侍人侍長又ハ侍人と侍人ハ侍  
在寺院のや侍長夫婦と侍人ハ侍人ハ侍  
一生夫婦と侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍  
侍侍侍と侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍  
名と侍長と侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍  
建立料理屋侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍  
侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍  
侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍人ハ侍

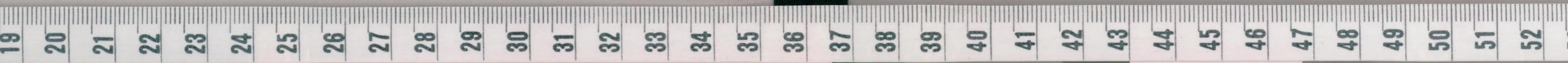




ゆり

女子十二四子好しあ成りしついでを夫とせむべき  
人と思ふはとて一し多と伝式は教人と云合約書成  
しむづしあ成りしついでを夫とせむべき  
切の裏のと中日布風のりいし又親乳香を念中  
去り妻のしあ一即尚ち甘ん人い毎に山山  
あて女に肩目よりしきく多くは能湯をきくひ  
のこりて白粉紅を在坐しある情危を憶けりあ  
の人をきくし

蘇武の教ハ大抵日本と同し封帳子納め地へ埋め  
りて出家物し人ありて澄りしひの根のりも改り  
物し人坊しきしあ成りしついでを夫とせむべき  
死を啓ししあ成りしついでを夫とせむべき  
と建並れしついでを夫とせむべき  
字ありしあ成りしついでを夫とせむべき  
紙の出りしあ成りしついでを夫とせむべき  
算法し理日布の算法しあ成りしついでを夫とせむべき  
り方を天事りあ成りしついでを夫とせむべき









仕立りし

提女のい母一横格別日本に替り不申の湊は者  
いそ系國旅人の為を且見く一女子女良と買ひ  
時八日中と同しと病後移されし  
酒ハ數不有ふ湯三日中力横成酒を下酒カ飲  
く餘酔ゆ代為く酔ふふと大平一婦し飲  
ふし車カ杯下賤の者飲し  
鴉片烟中毒と嫌ひし湊く平夜法本部  
児格い吸いとやぐ見及申し

ヒヤナと一琴ハシキウと一三味線セルヨトヤと胡弓  
柳の如く流行唄も有ふ

向の板より君の事見悲げ涙を流し  
又 物有し 化る姿誰か為物も有ま  
又 到したるは光が君の声の如くも有ま  
ハ寒サ子母のいし

左のナとくの端く一皮三味線琴杯と何と  
くもいし米利幹俗語を系し而和解いし書  
載し舟航却く歐羅巴列例し



得共船を制衣造さの遠り大船洋中より大浪を  
こり来者得て後没の恐れなくとて皆こ十回  
いこい送す

陸の運送車も馬も用ひしよまゝ人道占心を裁ぬ  
帆子送り波のりやういころしとて蒸氣車有る  
いく数十人是に乘ちて我等も旅行は蒸氣  
舟の機は同じとて近年禁制は厳し  
しよて見及ふ申す

路の低く高く計りて是に書状と裁取

驛へ自づから通達し飛脚を号し中より  
行進せしむは色かとははる無機私に  
以定而改し碇名を以て改めしは  
いふを考す

洋中より鯨皮西交の橋より鯨を足舟を見  
付る所小舟あり艘あり多のしよとて其端を  
取幾里も鯨子随ひ行弱る時分大船へ轉楫  
をとり巻揚筒切中は船中の大金とて油と  
申す肉を毒とす其後捨申す





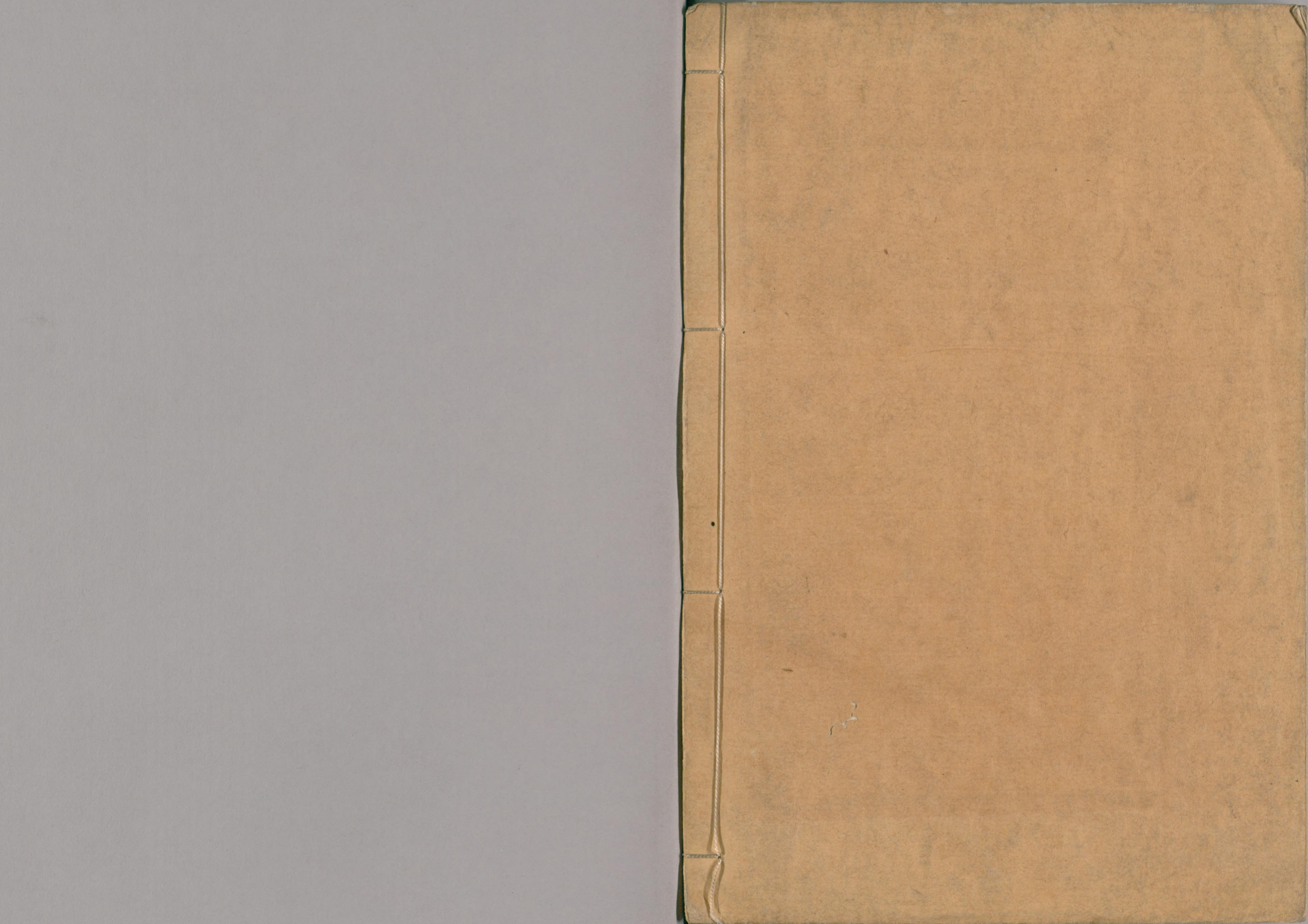












国立国会図書館 タイトル『漂客物語』 請求記号 860-38

ガラス使用